

総評

第四十四回東北電力中学生作文コンクールの応募数は、昨年よりも若干減少しましたが、それでも四八三校、一万五千五六編に及んでおり、たいへん規模の大きな作文コンクールとなっています。また、量だけでなく質も高く、最終審査に残った作文をみると、「わたしに『ちから』をくれたこと」の基本テーマの下で中学生が思いの丈を綴った心豊かな力作が出揃っており、ハイレベルなコンクールとなっていることがわかります。

今回の最終審査には、その基本テーマが影響してか、例年になく若さ、清々しさを感じさせる作品が多く見られました。また、内容的には部活動や学級における仲間との、そして家族のうち特に祖父母や母親との絆から「ちから」を得て明日への活力、生き方に結びつけた作品が多く見られました。そうした中で異彩を放ったのが秋田県の柿崎正宗さんの「つながりの中で生きる」であり、秀逸の描写力とユニークさが評価されて最優秀賞に輝きました。親戚のお寺のお盆の墓行に動員され、檀家とお寺との結びつきの「ちから」に支えられて冷や汗をかきながら奮闘する様子をユーモラスに綴った読み応えのある作品です。

岩手県の及川陽実さんの「人を『想う』ちから」は、重篤な病を主治医、仲間、家族の支援、言葉から「ちから」を得て、これからは「思いやり」の心で恩返ししていこうとする姿がみずみずしい文章で書かれています。山形県の桑嶋愛さんの「殻を破る」は、仲間、家族、先生のサポートに「ちから」を得て思い切った殻を破る様子が清々しい文章で綴られています。福島県の今村真生さんの「真っ直ぐ、生きる」は、生誕と育児の経緯を誕生日の度に繰り返し語る母親の言葉に、今年は聞く側の自分の成長によって転機が訪れ、「ちから」を得て真っ直ぐに生きることを決意する凛々しさを感ぜさせる作品です。

三世代、四世代の家族のもとで生活する中で祖父母や曾祖母などから「ちから」を得た作品として、まず青森県の佐藤那実さんの「前だけを見て」が挙げられます。部活ができずストレスが溜まっている中で、病弱な祖母が語った「出来ることに感謝する生き方」に「ちから」を得て、前を見て生きようとする姿がしっかりとした文章で書かれています。宮城県の渡邊里穂さんの「遠回しの愛」は、日常の動静から悪い印象を抱いていた祖父に対して、祖父が残した律儀な

帝京大学教職大学院客員教授
元文部省初等中等教育局教科調査官
澁澤文隆

メモ書きの付いた写真から物心のつく前の祖父の愛と出会い、祖父観の転換とともに「ちから」を得た様子が、工夫した構成と素直な表現でしっかり書かれています。

多く見られた部活動に関する作文のうち、新潟県の山家生流さんの「勝つための負け」は、本から得た考え方を「ちから」にして剣道の練習、試合に分析的に取り組み、上達していく様子を論述した作品です。

これらの作品はいずれも構成、表現力がよく、優秀賞に選ばれました。

本コンクールの応募学校数、応募作品数は、第三十四回（平成二〇）前後をピークに数字的には漸減傾向が見られます。しかし、学校数、生徒数の変化を考慮しますと、それはむしろ高水準で停滞していることと見ることができでしょう。また、その変化には、学習指導要領の改訂による「言語活動の充実」「表現力」が重点事項になったことも、反映していたといえるでしょう。換言すれば、今回（平成三〇）の応募数の減少は、新学習指導要領の重点事項が「主体的、対話的で深い学び」（アクティブ・ラーニング）に移っており、それが反映しているといえるでしょう。しかし、今回の最終審査の対象になった各作品を読んでもわかる通り、子どもは学校や家庭、地域の生活の中で一所懸命に学び、体験し、まさに青春を心豊かに過ごしています。それは、授業以外の場でも「主体的、対話的で深い学び」が成立、展開していることを意味しています。その学び、体験を放置するのではなく、発揮する場を提供し、共有化するなどして成長の糧にしていけることが大切なのではないでしょうか。アクティブ・ラーニングを効果的に推進するためにも、作文コンクールを積極的に活用することが肝要と考えます。特に、大人ばかりではなく子どももスマホに慣れ親しみ、SNSで短文による感性的な会話が横行している今日、子どもにとつて長文の作品に挑むことが生活、体験を振り返り、充実化を図っていく上で必要不可欠になっているといえるでしょう。

最後に、本事業を主催、後援、支援してくださっている諸機関、関係する皆様方に敬意を表し、深甚の謝意を申し上げます。